

リスボン地震に見る文学の想像力¹⁾

——天災と人災を超えて——

重 見 晋 也

はじめに

今回のシンポジウムのテーマとなっている「黙過」に関連して思い出されるのは、2011年3月11日の東日本大震災です。こうした未曾有の大災害の文脈においてこそ、神の沈黙、神の「黙過」について語るができるのではないかと思います。そこで私は、かつて西ヨーロッパを襲った大災害のことを取り上げたいと思います。つまり、1755年11月1日にポルトガルのリスボンを襲った大地震についてお話することで、このシンポジウムに話題を提供しようと思うのです。

1. 天災としての記録：イマヌエル・カントの地震論

リスボン地震に対する興味は、20世紀になっても忘れられてはいません。1931年に放送された子ども向けのラジオ番組で、ドイツの作家ヴァルター・ベンヤミンはリスボン地震をテーマとして取り上げています²⁾。ベンヤミンの記述を適宜引用しながら、ポルトガルで起こったこの地震がどのようなものだったのかを振り返りましょう。「1755年11月1日にリスボンを壊滅させた地震は、ほかの災害と似たひとつの災害、というものにはとどまらない。それは多くの点で無類な、注目すべきものだった。[...] まずこの地震は、もちろん、かつて起こったうちでも最大の、もっとも破壊的なもののひとつ」として、「ほかにはほとんど例がないほどに、あの世紀の全世界の関心をあつめ、全世界を興奮させた」。当時、「強大な植民地大国としての絶頂期にあり、リスボンは、世界でもっともゆたかな商業都市のひとつだった。テージョ川の河口にあるその港は、常に多数の船でにぎわって」おり、「この都市の家屋数は三万を数え、人口は二十五万をはるかに超えていた（そのうち約四分の一がこの地震にさいして命をおとしている）」。「ポルトガル王に至っては、全く雲の上の存在と思われていたから、災害を全ヨーロッパに詳しく報じた数かずの瓦版のなかには、かくも偉大な王までが俗人同様に災害にみまわれたというので、すっかり取り乱しているものがあるしまつである」。

リスボン地震については、発生から百年近く経てなお、新たな報告がいくつも現れることになるのですが、それはこの地震が「その影響範囲からいって、前代未聞の規模のものだった」

からです。「ヨーロッパ全土はいうまでもなく、アフリカでまでこの地震は感知された。余波の及んだ地域の総面積はじつに二五〇万平方キロメートルになる」。実際に、モロッコの海岸からアンダルシアとフランスの海岸という地中海の南北で、激しい揺れが感じられたことが報告されています。この激しい揺れにより、ジブラルタル海峡から大西洋に出たスペインの都市カディス、そこから内陸に二十五キロメートルほど入った都市のヘレス、さらにジブラルタル湾を挟んでジブラルタルの対岸にある地中海の都市アルヘシラスは、全滅してしまいます。

ベンヤミンのこのラジオ原稿は、実のところ、18世紀のドイツの哲学者イマヌエル・カントの論文を参考にして執筆されたものです。カントといえば、1756年の夏学期からケーニヒスベルク大学で、自然地理学の講義を行っていたことが知られています。その同じ年にはリスボン大地震に触発されて、三編の論考（『地震原因論』、『地震の歴史と博物誌』、『地震再考』）を発表しています。これらの論文は、カント自身も『地震の歴史と博物誌』のなかで認めているように、「自然の営みと災厄を伴った不思議な自然的事態とその原因を綴る」³⁾ものにすぎず、地震のメカニズムについての解説と、リスボン地震の博物誌的な記述にとどまるものです。さらに、地震のメカニズムについての解説それ自体も、残念ながら18世紀的な理解にとどまっておき、現代における地震のメカニズムについての理解からは程遠いと言わざるをえません。そもそも、カントはケーニヒスベルクの街から一步も外へ出たことがなかったのですから、彼の考察のすべては瓦版などの二次的な情報源にもとづくものでしかありませんでした。

ベンヤミンも先のラジオ番組の原稿のなかで、カントに言及しています：「当時、これらすべての諸事象に誰にもまして熱心にとりくんだのは、ドイツの大哲学者、カントだった」⁴⁾。しかしベンヤミンがラジオ番組で本当に紹介したかったのは、当時の瓦版のひとつに掲載された、リスボン在住のイギリス人の手記の方だったのかもしれない。自宅に居て被災したそのイギリス人は、高台にある聖パウロ墓地へ避難します。そこで彼は、第一波から遅れること一時間後に起こった地震の第二波が、ひとつとを襲うのを目の当たりにするのです：「目の届く限りの海面で、無数の船が大揺れに揺れ、互いに衝突しあっていたのだ——大嵐に見舞われたかのように。とつぜん、海岸の堅固な埠頭が、そしてそこにいれば安全だと信じこんでいたすべてのひとつとが、海に呑まれた。大小の船の上に逃げていたひとつとも沢山いたが、それらの船もいっせいに、海の藻屑になった」⁵⁾。

ベンヤミンが引用しているイギリス人の手記からは、前代未聞の規模で発生した地震によって、街や人々が脆くも崩れ、消失していくさまを目の当たりにして、彼が感じた驚愕と恐怖とを絶望のなかに読み取ることができるのです。

2. 人災としての表象：ヴォルテール、『カンディード』

フランスを代表する啓蒙思想家のひとりであるヴォルテールもまた、リスボン地震に大きな

影響を受けたひとりです。ヴォルテールは180行にも及ぶ『リスボンの災厄についての詩』⁶⁾と題した詩を1756年に発表しています。

詩では、神の怒りの不当さが詩人の嘆きを引き起こします：「あなたは言うのですか 山積みになった犠牲者たちを見て／『神が復讐なされたのだ、彼らの死は彼らの罪の代償なのだ』と／どんな罪、どんな過ちをこの子供たちが犯したというのでしょうか／母親の潰れて血だらけになった胸に抱かれているというのに」⁷⁾。そして、詩人の嘆きは、最後には神にたいする絶望に行き着きます：「昔アラブの王様が忌野際に／崇拜していた神に向けて心の底から祈りを捧げて言いました／『おお唯一の王よ、唯一の果て無き存在よ、私はあなたに持っていきましょう／あなたがその広大さのうちにおいても持っていないすべてを／欠点、後悔、諸悪、そして無知。／けれどもそこに付け加えることができるものには希望もあるのです。』」⁸⁾

ヴォルテールのこの詩は、先ほどのイギリス人のような地震の被災者たちの心情を、神に希望を託すことすらできない絶望として、代弁しているかのようです。

この詩だけに満足せず、ヴォルテールは1759年に発表した『カンディード』でも、リスボン地震を小説の題材の一つとして扱っています。当初匿名でドイツ語訳だと偽って発表されたこの小説は、哲学者のパングロスと無垢なカンディードが世界中を旅して様々な困難に見舞われるという物語です。ヴォルテールはこの作品でカンディードの側に立ち、神が作った最善の世界において悪は必然であるとするパングロスのような弁神論者を、批判したとされています。パングロスは言います：「能うかぎりのこの最善の世界では、すべての出来事が繋がっている。その訳いかんとなれば、そもそも君が、キュネゴンドを愛したがために、したたか尻を蹴られて美しい城から追放されなかったならば、してまた宗教裁判にかけられたり、アメリカ大陸をほつつき歩いたり、殿をぐさりと突き刺したり、あの楽土エルドラドから連れてきた羊をすべて失ったりしなかったならば、君はいまここでこうしてレモンの砂糖漬けやピスタチオを食うことにはならなかったろう」⁹⁾。このように哲学するパングロスにたいして、カンディードはこう言い放って、物語は幕を閉じるのです：「いかにもおっしゃるとおりです。何はともあれ、わたしたちの畑を耕さねばなりません」¹⁰⁾。

物語の中でリスボン地震に関する記述は、第四章から第六章までの三章を占めています。まず、時化のためにカンディードとパングロスの乗っていた船が沈没してしまいます。われわれの二人ともうひとり再洗礼教徒（アナバプティスト）だけが助かり、岸に漂着します。彼らはリスボンの街へと歩みを進めます。すると、街に入った途端に大地震が起こるのです：「市中に足を踏み入れたかと思うと、たちまち足下の大地が震動するのを感じた。港内は海水泡立ち高潮して、碇泊中の船舶は破壊された。炎炎たる焰、火の粉の渦巻が通りや広場を覆うた。家は倒れ、屋根は土台の上に落ち重なり、土台はばらばらに飛び散った。老若男女三万の住民は倒壊した家屋の下に押しつぶされた」¹¹⁾。

三万という家屋数への言及などからは、ヴォルテールとベンヤミンに共通する情報源がある

ことが推測されますし、それがどのような印刷媒体だったのか、と興味をそそられます。しかしここで注目したいのは、地震に襲われた後のリスボンの街の様子を描く第六章です。それは次のように始められます：「リスボンの四分の三を破壊した地震の後で、この国の賢者たちは、全滅を防ぐには盛大なアウト・ダ・フェ（auto-da-fé [ポルトガル語]）を公開するよりほかに有効な手段はないと考えた。コインブラの大学で、幾人かの人間をとろ火で焼く盛大な儀式の見世物こそ、大地の震動を防止する上に絶対確実な秘法なりと決定されたのである」¹²⁾。アウト・ダ・フェ、フランス語にすると Acte de foi 「信仰のおこない」ですが、これはスペインやポルトガルで行われていた宗教裁判の異端判決宣告式のことです。しばしばその宗教裁判には火刑が伴われていました。物語のなかでも、コインブラ大学で出されたこの決定のために、カンディードとパングロス以外の二人と一緒に捕らえられてしまいます。

このリスボン地震のエピソードとしてのアウト・ダ・フェはヴォルテールによる全くの創作なのですが¹³⁾、想像力によるものとはいえ、災害の震動を鎮め、神の沈黙を前にした恐怖を治めるために、より大きな恐怖が求められていることは、注目に値します。

3. 反復される人災としての表象：アウシュヴィッツ

ヴォルテールが『カンディード』でパングロスに仮託して批判したのは、ライプニッツの弁神論である、とドイツの思想家テオドル・アドルノも、1966年に刊行した『否定弁証法』のなかで指摘しています：「リスボン地震だけでヴォルテールにとっては、ライプニッツの弁神論を捨てるに充分であった」¹⁴⁾。アドルノはそれに続けて、「自然の破局」（つまりは天災）よりも「社会的自然の破局」（つまりは人災）の方が重要であり、人災は「人間の悪から現実の地獄を作り出した」ものだと指摘しています¹⁵⁾。

アドルノはこうして人間の悪から生まれた現実の地獄としてアウシュヴィッツを取り上げています。そして、この強制収容所という人災の地獄を対象とした考察によって、彼は自らの「否定弁証法」¹⁶⁾が持つ今日的な必然性を強調しているのです。しかし、われわれにとって重要なのは、アドルノが天災と人災を区別し、人災こそが地獄を現実にする、と指摘していることでしょう。『カンディード』でヴォルテールが描き出している、リスボン地震後に執り行われたアウト・ダ・フェは、まさにそのような人災のひとつといつてよいでしょう。リスボン地震では、天災によって引き起こされた恐怖を鎮めるために、人災による地獄の恐怖が要求されたと考えることができるのです。ここに私たちは、天災の恐怖が人災の恐怖へと連鎖していくさまを認めることができるのです。

ところで、アドルノが人災の地獄として取り上げているアウシュヴィッツは、強制収容所におけるユダヤ人虐殺をあらわすメトニミーですが、これは当時のフランスとも無縁な事柄ではありません。1940年6月22日から1942年11月10日までのフランスは、北がナチス・ドイツ

の統治下におかれ、南はヴィシー政権によって統治されていたことはよく知られています。南北に分断されていたフランスでは、北部地域で1942年7月16日にヴェル・ディヴ事件が起こり、ドイツ軍ではなくフランス警察が、12,884人のユダヤ人を逮捕しました。また、南部の自由地域でもユダヤ人に対する強制逮捕が行われています。人災の恐怖はフランスにおいても引き起こされていたのです。

とはいえ、第二次世界大戦時に、特にドイツに占領されていたフランスの人たちにとって大きな問題だったのは、やはり南北に分断された国土の回復だったのでしょうか。このことは、1942年11月11日にフランス全土がナチス・ドイツの統治下におかれた後になってようやく、全国抵抗評議会（CNR：Conseil National de la Résistance）などのレジスタンス活動が組織化されてくることにも見て取れます。ナチス・ドイツによって引き起こされた人災は、フランスではレジスタンスという反応を呼び起こしたのです。レジスタンスの活動内容は、ドイツ軍へのゲリラ作戦など暴力的なものを当然含んでいました。大義は違えども、人災は新たな人災を呼び起こし、ここでもまた、連鎖反応とでも呼ぶことができるようなものを引き起こしたのです。

フランスのレジスタンスが、暴力だけではなく、ペンも用いたことはよく知られています。ヴェルコールの『海の沈黙』は、南北分割統治中の1942年2月にミニユイ出版（Éditions de Minuit）から非合法出版物として刊行されました。分割統治が解消された後に、非合法出版された『レ・レットル・フランセーズ』第5号（1943年1-2月号）は、ヴェルコールの『海の沈黙』を「ドイツの占領以降にわれわれが読む機会を持った本のなかでもっとも感動的でもっとも深く人間的な本」¹⁷⁾と評するコメントを掲載しています。そしてそのコメントの上には、無記名ではあるものの、かつてのシュールリアリストで詩人のポール・エリュアールが寄せた「勇氣」と題する詩が掲載されています。そのなかでエリュアールは、パリをフランス人の手に取り戻すために勇氣を持って立ち上がろうと呼びかけるのです：「ふたたび朝がパリの朝がやってくる／解放のあけぼのの光が／生まれでる春の息吹がやってくる／おろかな敵軍は落ち目だ／おれたちの敵よ この奴隷たちが／もしも分別をもっていたら／分別を持つことができるなら／こいつらが立ち上がるだろう」¹⁸⁾。

自由を奪われ、抑圧された状況にあったとはいえ、レジスタンスを呼びかけるエリュアールの詩も、人災の恐怖を別の恐怖で振り払う行為でしかないということもできます。

4. 文学の想像力と検閲制度

ところで何故エリュアールは名前を伏せて詩を発表しなければならなかったのでしょうか？考えられるひとつの原因に、フランス全土で実施されていた検閲制度をあげることができます。ドイツ占領下においては、出版界、特に新聞や雑誌などはナチス・ドイツやヴィシー政権

の監視下に置かれていたのです。

ドイツ軍の占領下にあつては、日刊四大全国紙の一角を占める「ル・マタン」紙のような新聞も、ドイツ軍の検閲を受けることになりました。とはいえ、北部地域では「ベルンハルト・リスト」や「オットー・リスト」などの、書籍を対象とした流通禁止図書目録が存在していたことが知られています。ヴィシー政府では今の所そのようなリストの存在は確認されていません。しかし南部地域においても検閲は実施されていたのでして、それは文芸雑誌を含めた全ての定期刊行物に及んでいました。

検閲制度を導入していたヴィシー政府の統治下において、発行停止処分を受けた文芸雑誌がひとつだけありました。『コンフリユアンス』というリヨンで発行されていた文芸雑誌です。同誌は、戦時中には珍しく映画評論を定期的に掲載していることで有名でしたし、北部地域にも流通するなど「南の NRF 誌」の異名も取っていた雑誌です。そして何より、『コンフリユアンス』誌はヴィシー政権下で唯一発行禁止処分を受けた雑誌としても知られています。「アラゴン氏の詩を掲載しようとしたため」¹⁹⁾に1942年8・9月号の2号について発行禁止命令を受けたのです。ペンによるレジスタンスは未然に防がれ、反対に発行停止という報復措置が執られたのです。実のところ、この発行停止措置は、『コンフリユアンス』誌とヴィシー政府の検閲当局とのあいだに、発刊当初から繰り広げられた戦いの目立った一戦であるにすぎません。

そもそも、『コンフリユアンス』誌とヴィシー政府の検閲との戦いは、雑誌の創刊時から始まっていたのでした。ヴィシー政権下では、新しく雑誌を発行し始めることは認められていませんでした。しかし、『コンフリユアンス』誌の実質的な創刊者であるルネ・タヴェルニエは、創刊の序文で「戦前に発行が開始され停止していた『コンフリユアンス』誌を再開する」と記し²⁰⁾、ヴィシー政府の検閲の目を逃れます。事実、パリ解放後に出された同誌のなかでそのことを回想してもいます²¹⁾。『コンフリユアンス』誌は、新たに定期刊行物の発行を認めない、というヴィシー政府の行政方針をかいくぐって創刊された文芸雑誌だったのです。

この二重の侵犯行為が示しているのは、押しつけられた災厄を暴力によって浄化することを求めるとき、その暴力は人間の活動のあらゆる次元において実践されるということではないでしょうか？ しかし、そのようなものとしての暴力をわれわれは地獄と呼んで然るべきではないでしょうか。黙過された想像力は地獄への道を進み、それが故に黙過され続けるような連鎖を生むのです。ナチス・ドイツによる国土の占領という人災にたいして、レジスタンスという反応が、経験的な次元でも精神的な次元でも起こります。それらは反応しあい、連鎖しあいながら、いつ終わるともしれず続けられるのです。

このような連鎖を断ち切るためには、ヴィシー政府という秩序が崩れ、それに代わる新しい秩序が生み出されることが必要でした。人災の地獄を抜け出すためには、この連鎖を断ち切ることこそ必要になってくるといえるでしょう。この連鎖は、現在 IS らによって繰り返される

テロリズムによって現実のものとなっていると言えるのではないのでしょうか？ この連鎖を抜け出す手立てを見つけないければなりません。問題は暴力に暴力で対抗することではないのです。暴力の連鎖にいかにして終止符を打つことができるのか？ ここにおいてこそ黙過の想像力という問題が現代的な意味を持ちうるのです。

おわりに

天災であれ人災であれ、生み出された恐怖を鎮めるのに恐怖を連鎖させることを、われわれ人間はためらわないのだということにあらためて気づかされます。そして、ひとたび連鎖反応が起これば、文学すらも恐怖の連鎖のなかに、位置を見いだすことができるのです。しかし、文学の想像力がそのような連鎖を止める役割を果たすことも可能なのではないのでしょうか？ 人災の連鎖を止めることが難しいかもしれませんが、天災の恐怖を文学の想像力によって鎮め、それが人災の恐怖へと連鎖させないようにする、そうした役割を文学の想像力が果たすことはできないのでしょうか？

アルベール・カミュが『反抗的人間』のなかで引用したヴァン・ゴッホのことばは、この問題を考えるわれわれにとってひとつのヒントを与えてくれているのかもしれませんが：

「ヴァン・ゴッホのつぎのあっぱれな嘆きは、あらゆる芸術家の誇らかで、絶望的な叫びである。『私は人生でも絵画でも、神様なしにやっていける。だが悩んでいるときは、私より大きななものかなしには、つまり、私の人生そのものである創造する力なしにはすませない』²²⁾

注

1) 本稿は2016年12月3日に名古屋外国語大学において開催されたシンポジウム『黙過の想像力—ドストエフスキーとフランス文学—』（日本フランス語フランス文学会中部支部主催／名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター共催）にパネリストとして参加するためあらかじめ準備していた原稿に、若干の加筆修正を施したものである。

また本稿の考察は、日本学術振興会の学術研究助成基金助成金の交付を受けておこなっている「ヴィシー政権以降のフランス南部における文芸ネットワークについての実証的研究」（平成28年度採択基盤研究(C)、課題番号：16K02531）の研究成果を含んでいる。

2) ベンヤミン、「リスボンの地震」、pp. 109–116.

3) カント、「地震の歴史と博物誌」、pp. 292–293.

4) ベンヤミン、「リスボンの地震」、p. 112.

5) ベンヤミン、「リスボンの地震」、p. 115.

6) Voltaire, « Poème sur le désastre de Lisbonne », dans *Mélanges de Voltaire*, coll. Bibliothèque de la Pléiade, Librairie Gallimard, 1961, pp. 304–309.

- 7) Voltaire, « Poème sur le désastre de Lisbonne » : « Direz-vous, en voyant cet amas de victimes : / « Dieu s'est vengé, leur mort est le prix de leurs crimes ? » / Quel crime, quelle faute ont commis ces enfants / Sur le sein maternel écrasés et sanglants ? »
- 8) Voltaire, « Poème sur le désastre de Lisbonne » : « Un calife autrefois, à son heure dernière, / Au Dieu qu'il adorait dit pour toute prière : / « Je t'apporte, ô seul roi, seul être illimité, / Tout ce que tu n'as pas dans ton immensité, / Les défauts, les regrets, les maux, et l'ignorance. / Mais il pouvait encore ajouter l'espérance »
- 9) ヴォルテール、『カンディード』、p. 172.
- 10) ヴォルテール、『カンディード』、p. 172 : « Cela est bien dit, répondit Candide, mais il faut cultiver notre jardin. »
- 11) ヴォルテール、『カンディード』、p. 31.
- 12) ヴォルテール、『カンディード』、p. 34.
- 13) Note 79, dans *Contes en vers et en prose de Voltaire*, p. 468. 1756-1758年までの三年間に何度かアウト・ダ・フェが開催されているが、それらにおいては一度も死刑が宣告されておらず、また地震との関係において開催されたことは一度もない。
- 14) アドルノ、『否定弁証法』、pp. 438-439.
- 15) アドルノ、『否定弁証法』、pp. 438-439.
- 16) 「思想が真であるためには思考は——いずれにせよ今日では——思考自身に対抗して思考しなければならない」(アドルノ、『否定弁証法』、p. 444)。
- 17) *Les Lettres françaises*, no 5, p. 1.
- 18) 「勇気」、pp. 124-125. 最後の数行は、最初に発表された時から変更されている。最初の方がより敵への強い怒りに満ちているのではないか？
- 19) René TAVERNIER, « La Victoire en chantant », p. 118.
- 20) Anonyme, « Options et positions », dans *Confluences*, nouvelle série, no 1, juillet 1941, p. 2 : « Nous savons aussi que l'univers est fait de mystérieuses parentés, que la beauté a mille visages, mais une seule source. Pour en témoigner, nous reprenons aujourd'hui "Confluences", que la guerre avait interrompue. »
- 21) René TAVERNIER, « La Victoire en chantant », p. 118.
- 22) カミュ、『反抗的人間』、237頁 (Albert CAMUS, « IV. Révolté et Art », in *L'Homme révolté*, dans *Essais*, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Éditions Gallimard, 1965, p. 661 : « La plainte admirable de Van Gogh est le cri orgueilleux et désespéré de tous les artistes. "Je puis bien, dans la vie et dans la peinture aussi, me passer du bon Dieu. Mais je ne puis pas, moi bouffant, me passer de quelque chose qui est plus grand que moi, qui est ma vie, la puissance de créer." »)

参考文献

- イマヌエル・カント、「地震の歴史と博物誌」、『カント全集1 前批判期論集I』、岩波書店、285-325頁。
- ヴァルター・ベンヤミン、「リスボンの地震」、『子どものための文化史』、小寺昭次郎、野村修 訳、晶文社、1988年、109-116頁。
- Voltaire, « Poème sur le désastre de Lisbonne », dans *Mélanges de Voltaire*, coll. Bibliothèque de la Pléiade, Librairie Gallimard, 1961, pp. 304-309.
- Voltaire, *Candide, ou l'Optimisme*, traduit de l'allemand de Mr. le Docteur RALPH, 1759 [ark:/12148/bpt6k1057560q].
- Voltaire, *Candide, ou l'Optimisme*, traduit de l'allemand de Mr. le Docteur RALPH, dans *Contes en vers et en prose de Voltaire*, tome I, coll. « Classiques Garnier », Bordas, 1992, pp. 219-320.
- ヴォルテール、『カンディード』、吉村正一郎訳、岩波文庫 赤518-1、岩波書店、1956年。
- テオドール・アドルノ、『否定弁証法』、木田元、徳永恂。渡部祐邦、三島憲一、須田朗、宮武昭 訳、作品社、1996年。
- Les Lettres Françaises* (clandestines), no 5, Janvier-Février, 1943. [http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k884308m?rk=

64378;0]

「勇気」、『苦悩の武器』、1944年、『エリュアール選集 I』、嶋岡晨訳、飯塚書店、1972年、238-239頁、および大島博光、『レジスタンスと詩人たち』、白石書店、1981年、122-125頁。

大島博光、『レジスタンスと詩人たち』、白石書店、1981年。

René TAVERNIER, « La Victoire en chantant », dans *Confluences*, no 34, août 1944, pp. 115-126.

Confluences, nouvelle série, no 1, juillet 1941.

Albert CAMUS, *L'Homme révolté*, 1951, Éditions Gallimard, dans Albert CAMUS, *Essais*, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », pp. 407-799.

アルベール・カミュ、『反抗的人間』、『カミュ全集』第6巻、新潮社、1973年。

キーワード：ドイツ占領下におけるフランス文学、1755年リスボン地震、天災と人災

Sommaire

Power of Literary Imagination with respect to the 1755 Lisbon earthquake:
Beyond natural and human-made disasters

SHIGEMI, Shinya

Voltaire insère une épisode du séisme de 1755 à Lisbonne dans son *Candide*. Il est à noter une scène dans laquelle on insiste sur la nécessité de l'Inquisition, « auto da fê », afin de calmer la Catastrophe. L'oeuvre ne cesse d'inspirer même au XX^e siècle. Theodore Adorno distingue la catastrophe d'origine naturelle et celle d'origine humaine et il considère que la dernière suscite de plus graves conséquences que l'autre citant le nom d'Auschwitz comme exemple.

On peut le confirmer avec la Shoah en France, comme le montre la « Rafle du Vel' d'Hiv ». On organise la Résistance et recourt non seulement à la violence pour lutter contre cette terreur, mais aussi au stylo et à l'encre. Or, l'écriture de la Résistance enchaîne des terreurs ou des désastres.

Il s'agit donc de couper l'enchaînement de réactions et de terreurs, qui sont faites du désespoir de l'absence de Dieu. C'est la littérature qui prouve la réaction contre la suite des terreurs, comme Albert Camus cite dans *L'Homme révolté* un cri désespéré de Van Gogh : « Je [puis] bien [...] me passer du bon Dieu. Mais je ne puis pas, [...] me passer [...] [de] la puissance de créer. »

Keywords : French Literature under German Occupation, the 1755 Lisbon Earthquake, natural and human-made disasters